
金くれ老婆との遭遇

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金くれ老婆との遭遇

【Nコード】

N5714U

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

実話。

散歩してたら、やっかいな老婆に話しかけられ、巻き込まれた。

「1000円貸してくんない」

歩いていると、いきなり声をかけられた。

声のほうを見ると、顔中あばただらけの老婆が座っていた。

「お金は無いです」

私は本当に一銭も持っていなかった。

「そんな・・・」

「とりあえず図書館に行きましょう。ここじゃ蒸し暑いですからその日はかんかん照りで、蒸し暑かった。」

「図書館なら貸してもらえるかな」

老婆は横に並んでついて来た。

元々図書館へ行くつもりだったので、連れ立って歩いた。

「貸してくんないと帰れない」

と、老婆は言う。

「電車でないと帰れないんですか」

と問うと、

「お腹が減ったから、食べ物を買いたい」と言った。

私は心の中で

「食べ物に1000円もかからないだろう。これは怪しい」と思った。

「500円でいいから貸してくんない」

「お金ないので」

「1000円でいいからさ」

「私、本当に持ってないんです」

私は、ノートと水筒のみが入った鞆の中を見せ、飛び跳ねてみせた。「疲れたから、あたしここで待ってるわ。1000円借りてきて」

なんとという他力本願。ちよつと腹が立った。

「ご自分で借りに行けばいいじゃないですか」
私はそう言い捨てて、図書館へ向かう。

図書館で、お金は借りなかった。

自分の用事を済ませる間、作戦を練った。

図書館へついてこなかったのは、やはり怪しい。
通報されると思ったのだろうか。

食べ物なら、老婆のいた近くのお店で試食が出ていた。

それを食べるよう、老婆に提案しよう。

怪しいとはいえ、暑い中外で待つ老婆が心配だったので、五分で済ませて図書館を出た。

しかし老婆はいなくなっていた。

「新手の詐欺か。それとも誰かに恵んでもらったのか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714u/>

金くれ老婆との遭遇

2011年10月6日01時06分発行